

継承記憶の語りにおけるスタンスと間主観性

崎田智子（同志社大学）

1. はじめに

継承記憶の伝達は直接経験の伝達とは異なるが(Hirsch 2008), 史実が第1世代から第2, 第3世代へ継承されるメカニズム, 効果, 限界, 変容については究明されていない。本プロジェクトは, 国内外の戦争第2世代にインタビューし親族の戦時体験の回想の語りを調査し, 言語リソースが伝達にどのように作用するかを解明することを目的としている。従来, 戦争継承記憶の研究では主に第2世代に与える心理的影響に焦点が当てられ(Hashimoto 2015; Aarons & Berger 2017), その語りが個人的トラウマを超えて社会的影響を産むことが示されている(Shibata 2020)。そこでは言語とスタンスの関係性が重要な役割を果たしている。談話構築プロセスで語彙や統語上の響鳴によって表現されるスタンスは, アイデンティティ形成だけでなく個人が社会を形成する際の言語使用に関わる多面的構成概念であり(Johnstone 2007)社会的変化の基盤である。本稿では, 継承記憶の日本語語りにおけるスタンスと間主観性(Du Bois & Kärkkäinen 2012)を, 対話文法論(Du Bois 2014)とスタンス理論(Du Bois 2007)に依拠して分析し, 以下のメカニズムを実証する。語り手(第2世代)は過去の出来事に対して主観的な説明責任を負い, 語彙および構文の響鳴を含む言語リソースを用いて過去と現在を統合させスタンスをダイナミックに表現することで, 第1世代との間主観性を生むとともに聞き手(第3世代, 第三者)との間主観性を生みイメージ共有を促す。

2. 先行研究

史実継承の語りでは第1世代による想起に基づいて過去が再構成されて語られたものが第2世代の想起により再々構築されて語られる。史実継承記憶の研究には, 第1世代の原体験と次世代に継承される語り, 継承した第2世代の追体験とポストメモリー(Hoffman 2004; Hirsch 2008)と語り, 集合的記憶構築の側面がある。Halbwachs ([1950]1997)によると, 記憶とは現在の視点から過去が再構築されたものである一方で, 以前に行われた別の再構築に基づいて過去が再構築されたものもある。また, 想起を規定する現在の基盤は過去によって規定される。Assmann (2006)によると, 個人の記憶が言語化されると間主観的記号システムを介して交換, 共有, 提携, 確認, 修正, 議論が可能になる。Sicher (2000)と Hoffmann (2004)を比較すると, 第1, 第2世代の語りは異質で, 第1世代は経験した残虐行為に続く感情的側面を伝える傾向があり, 第2世代は記憶の表現・必要性・機能に重点を置く傾向がある。Schiffrin (2006)は, 史実の語り手が用いる言語リソース, 経験の主観性と感情, 語り手の認識的スタンス, に焦点を当てた。Schiffrin et al. (2008)は, 因果関係, 語りの構造, 内容, 意味付け, ストーリーラインに沿ったアイデンティティ構築, スタンス機能等を論じた。スタンスは, 話者が経験を語り自らを位置付けることで, 個人・集団の道徳的事象が再評価される場として言語に現れるものであり, 話者が聞き手との間主観性を構築する根底にある動的社會認知プロセスである(Du Bois & Kärkkäinen 2012)。Berman (2005), Nir (2017), Sakita (2013, 2017)は, スタンスがしばしば語彙的・統語的響鳴に表れることを示している。響鳴はテクスト内の構造的関係性と意味の類似性を活性化させる(Sakita 2006; Du Bois 2014)。

3. 研究方法

第二次世界大戦第2世代にインタビューし, 親の戦時中の個人的経験の中で最も記憶に残る事象に関する語りを収集した。まず, 語り手が第1世代と自身の経験に対して自己をどう位置づけるか, 語彙や統語構造でスタ

ンスをどう表現するか、語り全体がどう展開するかを、ダイアグラフ上で響鳴に着目して分析した。また、感情に関する descriptive・evaluative 表現を、感情主、感情内容、テーマとのつながり、言語特徴と共に表現、epistemicity・evidentiality の観点から分類・分析した。

4. 分析結果

1) 語りは、第1世代の事象評価と、語り手自身の過去と現在の自己としての事象評価を含む、重層的なスタンス構造をなす。第1世代の評価に語り手の評価が重ねられ、第1・第2世代のスタンスと間主観性が、継承記憶を語る上での基盤となる。例(1)をダイアグラフ表示すると、(2)の横列1~3, 8~10, 12~13, 16行目は第1世代の評価、横列点線枠は第2世代語り手の評価、横列実線枠11行目は両方の特徴が現れた箇所である。各世代のまとまりの中で響鳴が顕著に見られる。両者の事象評価が交互に出現するものを構造化するために左縦列枠（まあ、その、何か、で、結局）がテキスト・対人関係上の構造化機能を果たし、右縦列枠の文末表現として第1世代評価は引用標識（と、って、言って）、第2世代評価は終助詞や接続詞（で、ね、よ、わけ）が聞き手の認知に作用する。中央縦列枠は、第1世代（こう）第2世代（いう、いうふうな、思うような）に分かれて、theme・rheme、話し手・聞き手を時空間上でつなぐ機能を果たす。このように、第1世代の事象評価（敵兵が日本人から奪った時計を腕中にむやみに数多くつけていた）と第2世代語りへの評価を示す語（例、物言い）が組み合わさり、重層的に構造化されて語りを構成している。また、世代間のフォーカスの差異は Sicher (2000), Hoffmann (2004) に合致している。

(1) その時計を右手にも左手にも腕にも、いっぱい、こう、ついていると。何個も何個も何個も、腕、腕に、ついているっていって。変なことをするっていうね、例で。まあ、おかしな人たちっていう、例でね、そういう例がね、い、いっぱい出てくるんですよ。その、手、腕中に、こう、ついている、日本人から、こう、ね、奪ったものを、腕中に、こう、何か、こう、勲章みたいにね、こうやって何個も、1個でいいのにね、時計はついていって。その、常識と、常識はずれっていうふうなことをすごい言ってるわけです。で、こんなに腕につけてるんだとかいって、結局僕が、聞いてる僕が、変だねって思うような、感じなのね。物言いでですよ。

(2)

1	その時計を	いっぱい、 何個も何個も何個も、	右手にも左手にも腕にも、 腕、腕に、	こう、	ついている ついている	と。 ついていって。
2						
3						
4	まあ、		変なことをする おかしな人たち そう	って って	いうね、 いう、 いう	で。+1 でね、 がね、 んですよ。
5						
6						
7	い、いっぱい					
8	その、		手、腕中に、	こう、 こう、ね、 こう、	ついている、 奪ったものを、	
9	日本人から、		腕中に、			
10						
11	何か、			こう、	勲章みたいに	ね、
12	こうやって	何個も、 1個でいいのにね、			時計は	っていって。
13						
14	その、	常識 常識はずれ	と、 って	いうふうな	ことを	すごい言ってる
15						わけです。
16	で、	こんなに	腕に			つけてるんだ
17	結局	僕が、 聞いてる僕が、				とかいって、
18						
19						
20						
21		変だね	って	思うような、	感じ 物言い	なのね。 ですよ。

- 2) 第1・第2世代の間主観性を織り込んで聞き手に働きかける中で三者の間主観性が生じる。
 3) 語り手は第1世代の描写に基づいて継承された事象を語るが、この事象は、第2世代の継承記憶の中でしば

しば解釈され誇張される。例えば、語り手は、敵兵の野蛮さと忍び寄る脅威に対する第1世代の主観的評価に自らの評価を加えて残酷なイメージと恐怖を増幅させる。この時、第1世代の主観的評価に反復表現を多用し、evidentialとして引用標識(e.g.,って, と)を付す一方で、語り手の評価には、談話標識、副助詞、副詞等のヘッジ表現(e.g., やっぱり, 何か, ぐらい, まるで, みたいな)を多用して、話者の視点から聞き手の認知に働きかける終助詞(e.g.,よ, ね, よね)(伊豆原 2003)や間投助詞などの相互行為詞(interactional particle)を付す。また、自らの言葉で第1世代の感情とは異なる感情を表す時、しばしば並列構造で同期する。

4) 語り手の視点はその時々に交替し、各スタンスからの評価がダイアグラフに示される語り構造に反映されている。継承記憶語りのモードを immediate vs. displaced(Chafe 1994)に分けて Figure 1, 2 にモデル化した。

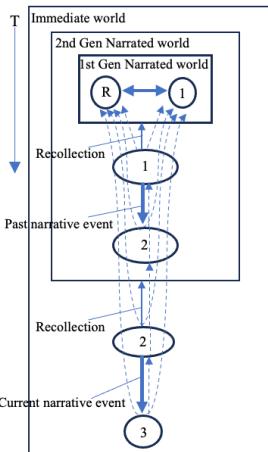


Figure 1: Inherited-memory narrative model (Immediate mode)

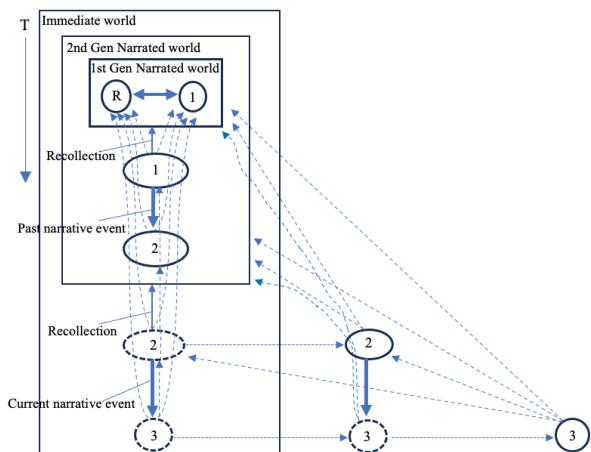
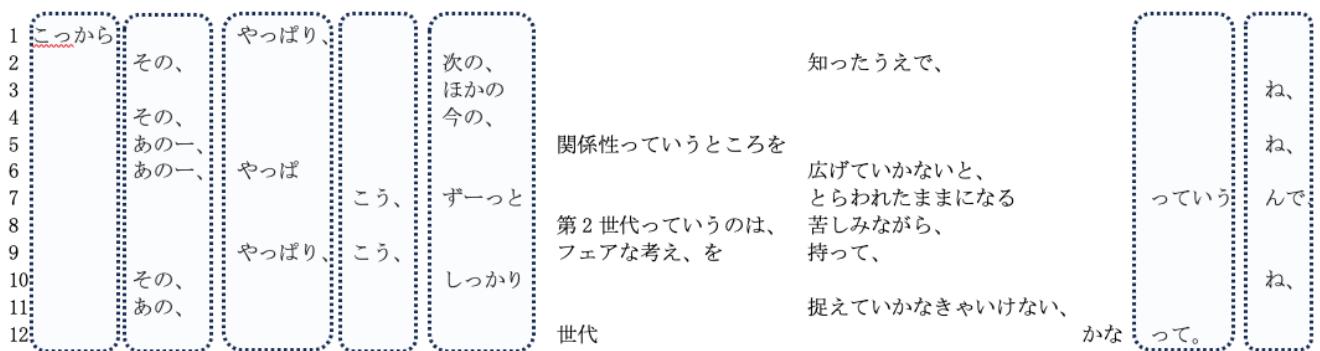


Figure 2: Inherited-memory narrative model (Displaced mode)

Figure 1 は第1世代が史実(1st generation narrated world)を想起して第2世代に語り、後に第2世代がこの語り(2nd generation narrated world)を想起して現在(Immediate world)第3世代に語る継承記憶の語りにおいて、先代の視点を通して事象を把握する中で間主観性が生じる状況を示しており、(1)がその例である。一方で、Figure 2 のように第2, 3世代が事象をより客観視することも可能である。(3)では、第2世代が語り自体を評価しており、ダイアグラフ(4)では、中央の第2世代の評価を各縦列枠内の言語リソースが支え、語りとして構造化している。

(3) こつからやっぱり、その、次の、知ったうえで、ほかのね、その、今の、あのー、関係性っていうところをね、あのー、やっぱ広げていかないと、こう、ずっととらわれたままになるっていうんで、第2世代っていうのは、苦しみながら、やっぱり、こう、フェアな考え、を持って、その、しっかりね、あの、捉えていかなきゃいけない、世代かなって。

(4)



語り手が(1)(3)のように記憶をたぐりながら多くの言い淀みや反復を含み一見不規則的に語るものは、実は(2)(4)のように様々な機能を有する言語リソースを響鳴・並列させて横列縦列に重層的に構造化した体系的な言語運

用である。

5. おわりに

継承記憶の語りにおいては、主観性と間主観性、客観的事象と個人的評価を対比する複雑な構造の中で、過去と現在の参与者達が事象評価に共同で関与し(joint engagement)、スタンスのダイナミックな様相が生じる。継承記憶の語りは直接経験に基づかず語り手の説明責任は限定的であるが、第1世代から第2世代に語られ史実証言となる前提として、第1世代が間主観的空間の多くを占める。同時に、第2世代が主観的説明責任を負い解釈・評価を織り交ぜる潜在的に変遷のプロセスである。言語選択と語り展開構造とスタンス調整により語られる事象への共感を高め記憶継承の意義を共有することで、第1、2、3世代の間主観性を基盤にして、効果的な伝達・継承を可能にしている。結論として、史実継承記憶の語りは、人間の言語、認知、記憶、スタンス、共感性、社会性、対人関係的能力、等の知のシステムが統合されたものである。

謝辞 科研費 23K00536による成果の一部である。Bracha Nir 氏との国際共同研究から発展したものである。

参考文献

- Aarons, V. & Berger, A. 2017. *Third-generation Holocaust representation: Trauma, history, and memory*. Evanston: Northwestern University Press.
- Assmann, A. 2006. *Der lange schatten der vergangenheit: Erinnerungskultur und geschichtspolitik*. München: C.H. Beck.
- Berman, R.A. 2005. Introduction: Developing discourse stance in different text types and languages. *Journal of Pragmatics*, 37(2), 105–124.
- Chafe, W. 1994. *Discourse, consciousness, and time: The flow and displacement of conscious experience in speaking and writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Du Bois, J.W. 2007. The stance triangle. In Englebretson, R. (ed.), *Stancetaking in discourse: Subjectivity, evaluation, interaction*, 139–182. Amsterdam: John Benjamins.
- Du Bois, J.W. 2014. Towards a dialogic syntax. *Cognitive Linguistics*, 25(3), 359–410.
- Du Bois, J.W. & Kärkkäinen, E. 2012. Taking a stance on emotion: Affect, sequence, and intersubjectivity in dialogic interaction. *Text & Talk*, 32(4), 433–451.
- Halbwachs, M. [1950]1997. *La mémoire collective*. Paris: Albin Michel. (1989. 小関藤一郎訳 集合的記憶 行路社.)
- Hashimoto, A. 2015. *The long defeat: Cultural trauma, memory, and identity in Japan*. New York: Oxford University Press.
- Hirsch, M. 2008. The generation of postmemory. *Poetics Today*, 29(1), 103–128.
- Hoffman, E. 2004. *After such knowledge: Memory, history, and the legacy of the Holocaust*. New York: PublicAffairs.
- 伊豆原英子. 2003. 終助詞「よ」「よね」「ね」再考 愛知学院大学論叢 51(2), 1–15.
- Johnstone, B. 2007. Linking identity and dialect through stancetaking. In Englebretson, R. (ed.), *Stancetaking in discourse: Subjectivity, evaluation, interaction*, 49–68. Amsterdam: John Benjamins.
- Nir, B. 2017. Resonance as a resource for stance-taking in narratives. *Functions of Language*, 24(1), 94–120.
- Sakita, T.I. 2006. Parallelism in conversation: Resonance, schematization, and extension from the perspective of dialogic syntax and cognitive linguistics. *Pragmatics & Cognition*, 14(3), 467–500.
- Sakita, T.I. 2013. Discourse markers as stance markers: *Well* in stance alignment in conversational interaction. *Pragmatics & Cognition*, 21(1), 81–116.
- Sakita, T.I. 2017. Stance management in oral narrative: The role of discourse marker *well* and resonance. *Functions of Language*, 24(1), 65–93.
- Schiffrin, D. 2006. *In other words: Variation in reference and narrative*. New York: Cambridge University Press.
- Schiffrin, D., De Fina, A., & Nylund, A. (eds). 2008. *Telling stories: Language, narrative, and social life*. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Shibata, R. 2020. Japanese inherited responsibility, popular narratives and memory of the war. In Sakamoto, R. & Epstein, S. (eds.), *Popular culture and the transformation of Japan–Korea relations*, 182–198. New York: Routledge.
- Sicher, E. 2000. The future of the past: Countermemory and postmemory in contemporary American post-holocaust narratives. *History & Memory*, 12(2), 56–91.